

第3学年 道徳指導案

日時 平成15年 6月6日 (金)

指導学級 3年5組

指導者 教諭 高野 昌義

- 1 主題名 自己を見つめる
資料名 ぼくにもこんな「よいところ」がある (出典 東京書籍)

2 主題設定の理由

(1) 価値観

学習指導要領では、視点1に「主として自分自身に関わること」をあげている。内容項目「自己を見つめる」は、「自己を見つめ、自己の向上を図ると共に個性を伸ばして充実した生き方を追求する」ことをめざす項目である。

中学3年生の時期は、自分と他人を比較し、自分の劣っている点を改善したいと考えると共に、それができない苛立たしさに精神が不安定になる時期でもある。自己の悪い点ばかりが目に見えてきたり、自分ができないことを他に原因があると押しついたり、他の者を批判ばかりするそんな言動も増えてきたりする。「完全な人間はいない」「他の人の良さも認めよう」と同時に「自分の良さはなんだろう」と考え、気づくことで、自分らしい目的や目標を持った生活ができるのではないかと考える。

本資料を通じて、まじめであるが他の人の欠点ばかりしか見えない主人公がその愚かさに気づき、自己の良さを伸ばそうとする心に変化したことに着目し、自分らしい生き方を追求することの大切さを考えさせたい。

(2) 生徒観

男子19名、女子13名と男女数の数はアンバランスである。日常生活の中ではあまりそれによる欠点を感じずに生活している。比較的、男子と女子の仲は良く、対立にならない面はある。しかし、積極的に会話をしたり、カバーしあおうという姿勢は少ないように思う。また、物事を判断する際、良かった、悪かったのみでしか表現できず、話し合いが深まらない面がある。体育祭活動を通して、良かったことを書く場面が作ったが「応援賞をとれて良かった」という表面的な部分だけの感想が多かった。卒業までには、心の中で思っていることを素直に表現できる生徒にして卒業させたいと考えている。

また、体育祭活動を通じて、「友達の良いところ発見」を行った。リーダー的存在の生徒の良さを再発見はもちろんあったが、それ以外の生徒の良さを発見も多少あった。日常生活の中に、他人の良さ、周囲の者の有り難さを発見することの活動を増やすことで、他人を見つめる心や自分を前向きにする心が今後育っていくのではないかと思う。

(3) 資料観

生活に密着した生徒作文である。まじめであるが、その他にある自分の良さが見いだせずにいる主人公。その時は、まじめではあるが他の生徒の良さも見いだせずにはいた。一学期終業式直前、良いところカードの授業が行われ、主人公の良いところも記入された。これで初めて自分にも良いところがあったんだと気づいた。同時にこれまでの自分がちっぽけに思え、人の嫌なところばかりを見る自分を捨て、人の良さを見つけて自分に吸収する生活を送ろうと決意する。

自分の欠点も視点を変えれば長所になることにも気がつかせたい。自分の長所を伸ばそうすることが前向きな姿勢につながる。日常生活の中にある人の批判ばかりする中学生の愚かな言動に気づき、自分ができるところを精一杯行うことが充実した生き方につながるということを生徒に気づかせたい。

(4) 指導観

まじめな性格の持ち主である主人公であるが、反面、他の人の欠点ばかりにとらわれ、良いところに目を向けようとするに欠けていたことに気がつかせたい。自分の良いところが周囲に認められたことで、自分自身の良さがあることに気づくと共に周囲を認めようとする優しい気持ちになれたことに気がつかせたい。

資料を通じて、上記のことを確認した後、今後の学級指導の中で、個々の「良いところ探し」を行い、さらには、「こんな良いところがあるからこんな職業に向いているのではないか」という進路指導に発展できるのではないかと考えている。また、「自分の学級」を振り返る際、学年所属の先生方、同学年のクラスから「3年5組の良いところ探し」或いは前担任の先生から「卒業するまでへの願い」など貰い、個人、学級の変容のきっかけをつかめるのではないかと考えている。道徳の授業がひとつの授業に終わらず、さまざまな学校生活の中で生かされていくようにしたいと考えている。

3 本時の学習指導

(1) ねらい

自分の良い面に目を向け、自己理解を深めると共に個性を伸ばして充実した生き方を追求する。

(2) 展開

	教師の働きかけ	生徒の反応	指導上の留意点	準備
導入	<ul style="list-style-type: none"> 自分自身が好きか嫌いかわかせる。 アンケート結果の提示 (前沢中3学年) 自分のどんなところが嫌いなのか 「嫌いなところ発表」を聞いて思ったことを発表させる。 アンケート結果の提示 (前沢中3学年) 資料を読む どんな主人公か確認する 	<ul style="list-style-type: none"> 挙手による反応 気が小さい 短気 飽きやすい ありのままの自分を出せない そういう欠点もあると思うが、こんな良い点もある。 その短所がうらやましく思える 	<ul style="list-style-type: none"> 自分以外にも自分が嫌いな人がいることに気がつく 3名位の生徒に絞る 3名くらいの生徒に絞る。 	<p>TP</p> <p>学習プリント</p> <p>TP</p> <p>CD</p>
	<p>学習課題の提示 主人公は、今、落ち着いた気持ちでいられるのは何故か？</p>			
展開前段	<ul style="list-style-type: none"> どんな風が変わったか 最初の頃の様子 	<ul style="list-style-type: none"> きちんとやるが適当な人を見ると落ち着かない (我慢できない) 自分自身に自信がなく、テレビで言うよう 	<ul style="list-style-type: none"> 同じまじめであるが、質的に違うことに気づかせる。 最初の頃の主人公 	紙板書と板書

展開後段	どう変わったのか	<p>に問題児ではないか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 漫画、ゲームの話をしている同級生が気になる。(責める気持ち) ・ 自分がむなしく思えた。 ・ 肩の力が抜けて楽になった。 ・ 良いところを吸収しよう。 ・ ゆっくりゆっくり自分とつきあっていこう。 ・ 良いところカードに良いところを書いて貰って嬉しかった 	<p>の考え方を発表する。</p> <p>変わった主人公の考え方を発表する</p> <p>一番の進歩は何かを考える。</p>	板書
	・ どうして変わることができたんだろう	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分が認められた。 ・ 頼りになると言われた。 ・ うらやましいと言われた ・ 人の嫌なところを見てどうなるのか。 	自分が頑張っていることが認められたということで押さえる。	
	・ 良いところカードを行って主人公が気がついたことは何か	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人の良いところを見るべきだ。 ・ 完全な人間なんていない。 	自分のだめなことに気がつき、それが自分を変えるきっかけになった。	
	学級の中のある人物の良いところを書かせる	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の意見を持って積極的に発言している。 ・ やる時はやる。 ・ 普段はおとなしいが、体育祭で恥ずかしがらないで踊った。 	相手の名前は発表しない。	・ 学習プリント
	発表させる。		3人～5人程度	
終末	今日の授業で感じたことをまとめる。 心のノートの引用、 教師の話			学習プリント TP

(3) 評価

- ・ 欠点ばかりを追求せず、良さにも目を向けた生活をする事で自己改善が図られることがわかる。
- ・ 級友の良さを考え、表現することができる。
- ・ 自分を変えるために自分のだめな所に気がつくことも大切ということに気づく。

6月上旬

「ぼく」はどんな気持ちから、自分のまじめさを受け入れることができずに苦しんだのだろうか。



「ぼくにもこんな」よいところがある

1—(5)反省と向上、個性の伸長 2—(5)個性や立場の尊重、謙虚、広い心
〔主題名〕 自己を見つめる
(生活に密着した生徒作文、葛藤資料)

(研究編P.46～47参照)

←導入 自分や他人を否定的にとらえて自信をなくしたり、他の人を非難した経験を発表し合う。

「まじめに見える子どもも問題を起こすことがあります。そして危険です。」

いつだったかテレビで、ある人が、そんなことを言っていた。

まじめな子供への偏見の態度。

今、親や先生の期待どおりに動く子どもは危ないのだそう。少々ふまじめで、明るい子どものほうがよいのだという。

そういう子どもがよいのなら、そうでないぼくはどうすればよいのだろう。

なにごととも言われたことをきちんとやろうとし、逆に適当にやってしまう人を見ると、なんだか落ち着かないぼく。そしてがまんできないぼく。

まじめな自分を受容できずに苦しんでいる。

しかし、そんなことを口に出してはいけない。自分がそんなまじめな人間だと思われたくないから。

でも、ぼくはほんとうは苦しい。どうしたらいいのか。

そういう思いが深まったのは、中学二年生の秋のころからだ。

そのころ、ぼくは保健委員会の副委員長になった。

副委員長になったぼくは、まず生徒会黒板に月一回、活動目標や活動内容などをていねいに書いた。自分が書いた目標に沿って積極的に働こうと努力した。また数少ない行事でも自分の委員会で

「ぼく」の自分自身への思い

「ぼく」はどんな気持ちから、まだ使えるものを捨てたり、授業中私語をしている友達を責めなくなったのだろう。

なにかできることはないか、としんげんに考えた。虫歯予防のポスターもかいた。トイレの使用上の注意の紙はりもした。

保健委員会の仕事。

昼休みや放課後、みんなが元氣よく教室の外に飛び出していく。ぼくはそれを横目で見ながら、残された仕事に取りかかっていったのだ。

三年生になつてからは、毎日、はさみでごみを拾い、ばけつに入れていく。

落ちていくごみはさまざまである。

もう使えないかさ、どろのついたくつ、古いラケットやピンポン玉、紙くずなど。

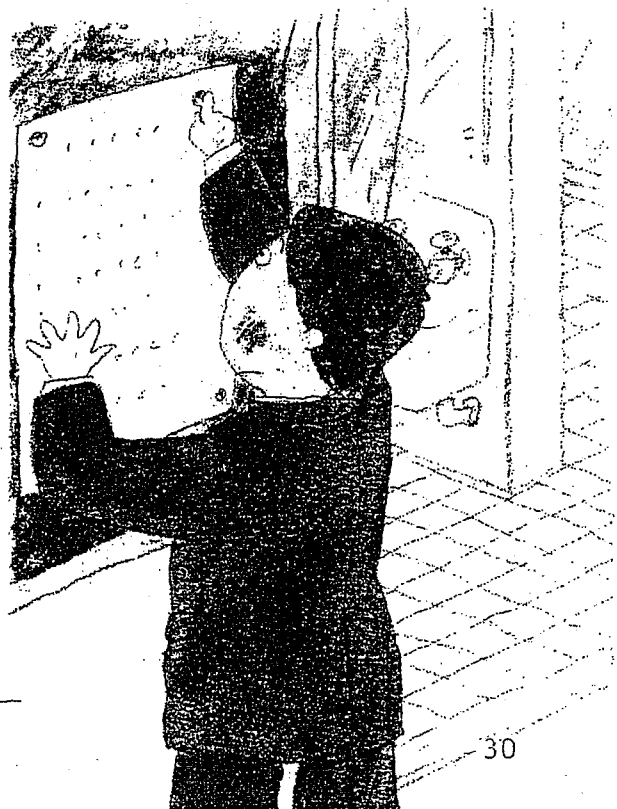
まだじゅうぶんに使えるボールペンや消しゴムなどの文具。

(学校はごみ捨て場じゃないんだ。) ぼくの心がさげぶ。
(まだ使える物なのに。) ぼくの心はなやむ。
「ぼく」の心の葛藤。

ごみ拾いをおしていろいろなことを考えた。ごみを捨てる時、それをごみにしていいのかどうか考えること。そしてごみを捨てる場所や手段をよく考えて、人のめいわくになったり、人をふゆかにさせたりしてはいけないこと。

自分に自信が持てない「ぼく」。

こんなことを考えているまじめなぼくは、テレビで言っていたように「問題」のある子なのだろうか。



「ぼく」のこれまでの活動と
クラスメートを責める気持ち

「ぼく」はなぜ、「おそるおそる」自分の紙に書かれた文を読み始めたのだろう。

また、一学期の期末試験前のこと。授業中、ぼくはいっしょうけんめいノートをとっているのに、まんがやゲームのことなど、授業と関係ないことを話しているクラスメイトがいるのが気になった。
(どうしてもっとまじめに勉強しないんだ。他人にめいわくをかけて平気なのか。)と責める気持ちがわいてきた。

一学期の終業式前のことだった。担任の先生が、クラスメイトみんなに、一人一人のよいところを、全員一人ずつ用意した紙に書こうと提案した。ぼくの名前が書かれた紙も、みんなの机の上を回っていた。

ぼくはぼく自身にも、みんなにもどんなよさがあるのか、あまり積極的に答える気にはなれなかった。

書き終えたあと、みんなが自分を書いてくれたことを、先生は一人一人に見せてくれた。

ぼくは期待していなかったが、おそるおそるぼくの紙に書かれた文を読み始めた。

○クラスのためにがんばってくれているね。

○君が担当している、教室のうしろの連絡黒板は充実しているよ。こんなにきちんとやってくれる人は、学校に入ってはじめて見た。

○みんなのために仕事をしてくれたり委員会をがんばっているよな。

○こつこつ勉強しているね。

○たよりにしています。いつも仕事をいっばい任せてごめんなさい。これからはわたしも負けないようにがんばるから、よろしくお願いします。わたしが知らないうちに、いろいろと仕

クラスメイトが見つけてくれた「ぼく」の「よいところ」

クラスメートが書いてくれた自分の「よいところ」
を読んで、「ぼく」はどんな気持ちになっただろう。
どんなことに気づいただろう。

事をこなしてすごいです。

字も上手だし、うらやましいな。

最初は照れくさかったが、やがてうれしきで目がしめってきて、それ以上読み進めることができなくなった。

こんなによいところが自分にあつたのだろうか。クラスメートがぼくをそんなふうに見つめていてくれたなんて他人から見たら、ちっぼけなきつかけだろうけれど、なんだかこれまでの自分がむなく思えた。

それと同時になんだか急に肩かたの力がぬけて、楽らくになつてきた。
自分や他者への見方の変化

(人のいやなところばかり見てどうなるのか。)

(人のよいところを見たらいいじゃないか。)

ぼくだって完全じゃない。それなの

クラスメートが見つけてくれた「よいところ」と、
それを読んだことによる「ぼく」の気持ちの変化





「ぼく」はなぜ「これまでとはちがって落ち着いた気持ちでいることができる」と感じたのだろうか。(設問1)

にいつも人のいやな部分しが見ていなかった。

自分や他者のいいところを見ようとする
気持ちへの変化。

ぼくをまじめと冷やかす人たちも完全ではない。けれどぼくをきちんとして見てくれている人もいる。ぼくもだめなんじゃない。そして、ぼくももつと大きな心で人を見よう。

ぼくはぼくの「まじめさ」に自信を持ち、人に負けない大きな心を持つとうと思
う。そして、人のよさを見つけて吸収し、大きくたくましくなろうと思う。

そうは言っても、今すぐに、このぼくをそうやすやすと変えられないだろう。ゆっくり、ゆっくりとぼくはこんな自分とつきあって変えていけたらいいと思う。それまでみんなよろしくねと言いたい。

今日も、ぼくは今までと同じように、教室でノートをとって、ごみを拾っている。しかし不思議とこれまでとはちがって落ち着いた気持ちでいることができる。ノートをとるとき、人の声が気にならない。どんなごみを拾うのも腹立たしくない。むしろ、ぼくが喜んでごみを拾い続けたら、それを見て同じようにごみを拾いたくなる人が一人でも増えるんじゃないかと思いついている。ぼくはもう決して危険な存在などではないのだ。

(生徒作文)

へまとめ、左記の設問2を扱う。

考えて

みよう

②自分やクラスメートの「よいところ」を見つけよう。

新たに生まれた「ぼく」の気持ち